や昔でいや夏季ですね。

丈　ええ、夏季どころじゃねえ、もう秋だね。

Ｉ　秋ですか。

丈　ええ。

Ｉ　ああそうかそうか、秋ですね。

丈　そのそれだでね、学者というものは、その自分の説をしっかりおさえて、なかなか屈しないけれどね、蚯蚓が鳴かないと言っているでしょう。それを儂どもの半牛という男はね、それは蚯蚓は鳴く、絶対に鳴くと。どういうわけだといった所が、それは餡こやでね、商売が、餡こやる関係上、水を沢山使う。内の裏の方に広い土間があって、その土間に煉瓦でこういう風に積んで、タンクをね。それが漏れるところがあるで、ビショビショとね、それからその煉瓦を積んだところにね、細い溝を作って裏の方へ水を抜いた。そしたところが、その落口のところにこの位の水溜りが出来ているだ。そこにまあ蚯蚓がいて、いい声をして夜さ鳴くで、それから、その家に使っている男に、あの蚯蚓が鳴くで、あの蚯蚓を大事にしとかにゃいけねえぞと言っておいたのをね、その溝をさらって蚯蚓を棄ててしまっただ。それっきり、鳴かないで、螻蛄（けら）が鳴くなんてあんな所にゃ来っこねえ、そりゃもう、蚯蚓がどうしても鳴くで、

とね。

雅　これはどうも池田先生（動物学博士）のご本職の方ですけど、たとえば季寄せには亀鳴くというのもありますが。

Ｉ　亀は鳴くかも知れない。そりゃ肺臓があるし、喉があるからね、プーと位はいう。

丈　ええ、かなり大きな声をしてね。それは渥美半島の江比間という所に旅館があってね、その旅館の主人が亀は卵を産む時鳴くと。亀はまあ、岩のきわのような砂の中に産んで入れておくと。それだで、その卵を取りに行くというだ。そうすると果してある。あの亀、卵を産む時は鳴くと、その後じゃ鳴かないと。

雅　季寄せにはその外、いろいろありますね。雀大水に入って蛤（はまぐり）になる。

Ｉ　ウン、あれも蛤というんじゃなくて、コウという蛙の一種だと言いますね、山蛤という。ありゃひきがえるのことですから、字を見て蛤というのは間違いですが、歳時記にはちょいちょい間違いがありますよ。

雅　先生、さっきおっしゃった「雀の陪堂（ほいと）」というのはどんなものですか。

丈　あれは、南の方へ帰り遅れた郭公が、高野山あたりの山の杉の木のうろかなんぞに、暖かになると餌もたべて、それから洞へ入って、寒く

涼袋（建部涼袋）
俳人。本名＝喜多村金吾
久域、のちに建部綾足

なってしまうと、洞から出ることができぬようになると、雀が気の毒に思って餌を運ぶ、雀のお客様というね、陪堂とは乞食という事だね。それであり得るものは付く、あり得ないものは付かないという芭蕉の心法があるだね。それでそのさっき、儂が何だだ、儂の前に発表した先生はね、建部涼袋の研究をしただがね。それから質問の時間があるもんだで、建部涼袋は絵がすばらしい、これはその俳人の俳画なんてもんじゃなくて、それはすばらしい絵を描いているが、絵の方の研究はなさったかと聞くと、いや研究しねえ、絵の方をまあ御覧なさって、それはすばらしいもんだ、それから涼袋という名前の書き方がね、落款の入れ方が涼袋というのと、その代の下に巾という字を書いた（帑）のと、代の下に山を書いた（岱）のもある。この三色あるが、そのあとさきはどうですと言うたら、いや、それもどうも知らねえちう。まあ、それも調べておくんなんし、この程度のね、まあ、何か一つ見つけてね、先生たちゃ大きな発表というのをやるけどね。そで、武将の俳諧とかね、そんなもの。それでまあ、あの本にはどうなってる、この本にゃこうなってると、誤りを正すということだね。そりゃ先生たちの仕事で結構な事だけどね、正風の真髄を語る人はねえだ。そこだで、心法という芭蕉の言葉、それで、その話の途中で、それを加えてね。それから他石さん（贄川他石）

対付
前句に対して対句のように付け、曲節の変化をもたらす案じ方

やなんどの俳諧講座や何でもね、心法ということにふれた所もある。そんな所もちょっと出してね、それでまあ、何だだ、昔の行脚、さんざんした人の座談の中には、おもしろいところがあるだ。駿河の蝸堂（松永蝸堂）やなんか、手まねをしてね、

秋の空尾上の杉にはなれたり
　遅れて一羽海わたる鷹

と、これが対というで、いかにも対付、縦のものに横のもの、動かぬものに動くもの、さ、いいじゃねえかと、そういう話をね、それからして、くれ縁に銀土器をうちくだき
　身細き太刀のそる方を見よ

と、こういう手つきをして、それで蝸堂は芭蕉のことを翁さん翁さんと、翁さんはこうして見せたと。それで銀土器というこの句へ、身細き太刀と、その句の位がね、いいと。それから、くれ縁にうちつけてというからして、出陣の若武者が水盃をする。生還を期さないと、床几に腰をかけて出陣する間際だね。それから恋句や何かでね、

小さき店出して久下の出はずれに
　二親の日も参る墓なき

と、不義をしている二人で家を出奔して流浪して歩いて、久下はあの伊

勢にある小さい町だ。久下の町の出はずれにとにかく小さい店を出して、まあまあ、これで食べられるようになったと言って。すると親を思い出す、お母さんの日だ、お父さんの日だ、なんてお参りに行きたいけど、お墓もない、こう言って二人で顔見合わせる、こういう恋だね。そんな話をまあ、巻いて行きながら、それに似たような所が出ると、その時に話すだ。

雅　先生、今日はいろいろお教えいただき、ありがとうございました。

芦丈翁年譜

年号	年月日	西紀	年齢	事項
明治	7 12 27	一八七四	1	伊那村山寺に生まる。
	18 12 28	一八八五	12	山園学校中等科六級卒業。就職まで家事を手伝う。
	26 7 1	一八九三	20	伊那郵便電信局に就職。
	27 1	一八九五	21	呉竹園馬場凌冬の門に入り、連句の指導をうく。俳句結社円熟社の正社員となる。はじめ、生花庵青隣と号す。
	30 1	一八九七	24	凌冬師より伝道の書をうく。この年、青隣の号を芦丈に改む。
	34 11 12	一九〇一	28	妻まつよを娶る。
	35 9 6	一九〇二	29	凌冬師急逝。
	37 6 30	一九〇四	31	伊那郵便電信局退職。
	37 7 1	一九〇四	31	諏訪郡平野村一分林製糸所に就職。
	41 9	一九〇八	35	凌冬七回忌追善集『砧のひゞき』で円熟社社長翠幹を補佐編集刊行。
	41 10 11	一九〇八	35	上田町の旅舎にて下平可都三翁と偶然同宿、対吟す。他門との応酬のはじめである。
	41 12 31	一九〇八	35	一分林製糸所退職。
	42 1 9	一九〇九	36	平野村諏訪倉庫株式会社に就職。
大正	3 12	一九一四	41	凌冬翁十三回忌追善集『露の秋草』を編集刊行。
	4 3	一九一五	42	風交集『斧枕』を編集刊行。
	7 5	一九一八	45	静岡市の松永蝸堂より連句に熱心の故をもって禾木、春湖、蝸堂と伝わった庵号抱虚庵を贈らる。

大正	10 11	一九二一	48	円熟社顧問となる。
	10 秋	一九二一	48	9月逝去したる円熟社社長翠幹のため追善の句碑を建立、『桃の実』の一集を編集刊行。
	12 10 16	一九二三	50	妻まつよ死去。
	13 10	一九二四	51	如苞、如水、凌冬、那美女と四代にわたり愛用された一位の文台を那美女より譲られ、文台披露を行なう。
昭和	14 3 1	一九二五	52	後妻まさよを娶る。
	2 11	一九二七	54	『呉竹園遺稿』を編集刊行、乾坤二冊。
	6 12	一九三一	58	中村竹邨と連句集『山一重』を共著刊行。
	7 2 28	一九三二	59	諏訪倉庫株式会社を定年退職。
	7 2	一九三二	59	円熟社社長に就任（円熟社「結社録事」により記載。結社録事は芦丈自筆なり）。
	7 9	一〇三二	59	伊那町山寺に草庵を建て、苧庵と名づけて移り住み、俳諧を主とした生活に入る。
	8 9	一九三三	60	伊那町狐林公園に門人有志の協賛を得て芭蕉碑建立。
	9 4	一九三四	61	翁碑建立記念集『麓の霧』を編集刊行。
	10 12	一九三五	62	円熟社月例句を年刊集に収め、十七年十二月まで八冊刊行。
	11 11	一九三六	63	俳句集『寒句行』を編集刊行。
	12 1 14	一九三七	64	増田龍雨、中村竹邨との三吟歌仙集を『下蔭三吟』と題し、竹邨と共著刊行。
	13 11 14	一九三八	65	松代象山神社鎮座正式俳諧奉納祭の宗匠をつとむ。
	15 11	一九四〇	67	西天竜耕地の水利にからみ、諏訪湖の魚族研究の要あり、調査員として滋賀県、茨城県に出張、湖沼魚族の調査をなし、諏訪湖釜口水門に同湖魚族に及ぼす影響の問題にとりくむ。

年号	年月日	西紀	没後	事項
昭和16	7 10	一九四一	68	伊那町町会議員に当選、二十二年四月まで二期つとむ。大戦中と敗戦後二年の激動期。
17	1	一九四二	69	山寺区長を一年つとむ。
18	9 28	一九四三	70	姨捨山上に松代十万石吟社中門人により、寿蔵の句碑を贈らる。
24	11 1	一九四九	76	俳句集『此五年』を編集刊行。
25	2 5	一九五〇	77	喜寿記念に中国、四国、九州行脚に出発。
25	2 19	一九五〇	77	四十三日間の行脚を終えて帰宅。
25	7 5	一九五〇	77	伊那町公園に門人外有志により寿蔵の句碑を贈らる（この句碑は四十五年四月春日公園に移転）。
26	12 5	一九五一	78	行脚記念『筑紫行』を編集刊行。
27	9 5	一九五二	79	伊那文化財保護調査委員に任命さる（生存中）。
28	4 9	一九五三	80	後妻まさよ死去。
30		一九五五	82	芦丈連句二千巻満尾記念に、北信門人記念集刊行会により「芦むら」刊行。
36	5 10	一九六一	88	米寿記念集『この一路』を編集刊行。
36	6 17	一九六一	88	米寿祝賀正式俳諧を東京・六義園内の心泉亭において、都心連句会主催により興行。
36	9 26	一九六一	88	信州大学文理学部において連句の講演及び実作指導をなし、その後信州大学連句会結成され、四十二年四月まで毎月、出張指導す。
38	4 20	一九六三	90	円熟社創立八十周年を記念し、俳諧『草原集』を編集刊行。
38	10	一九六三	90	連句俳誌「山襖」の発行を企画、三十九年一月二十三日第一号を発行、以後四十二年十一月まで隔月発行。
38	12 9	一九六三	90	都心連句会主唱の蕉翁二百七十年祭正式俳諧、東京松声閣に行なわれ、招かれて宗匠をつとむ。
42	10 18	一九六七	94	病の床につく。
42	12	一九六七	94	三十三年間つとめた円熟社社長を辞任。
43	2 14	一九六八	95	芋庵にて死去。
43	2 14	一九六八	95	勲五等瑞宝章を賜わる。
43	2 16	一九六八		伊那市西町弥生ケ丘の長桂寺墓地に葬らる。
昭和43	4	一九六八	1	物故の際寄せられた追悼句並びに俳諧葬の連句等を一輯せる追善集を「山襖二十六号」として発行（円熟社）。
44	2 16	一九六九	2	伊那市坂下公会堂において、一周忌追善会俳諧円熟社主催により興行。
45	4 26	一九七〇	3	信州松本市外浅間神宮寺において、信州大学連句会、東京都心連句会、松代俳句連盟合同主催による追善俳諧興行とともに全国俳句大会を行なう。関東、東海道、近畿より参加者ありて頗る盛会を極む。
45	9 14	一九七〇	3	追善集『芋日記』発行。

芦丈先生終焉記

東　明雅

芭蕉の芸術の真髄は決してその発句（俳句）のみにあるのではなく、むしろ俳諧（連句）にあることは、芭蕉自身が言っているところである（三冊子・宇陀法師等参照）。けれども、明治以後、この俳諧の伝統は無視され、ほとんど滅亡の危機にさらされている。最近ようやくこれを絶やしてはならぬと立ち上がる気運も見られるが、その矢先に連句復興の大黒柱たるべき根津芦丈先生が逝去されてしまった。昭和四十三年二月十四日のことである。

御逝去の約一年前、昭和四十二年三月に、私ども信大連句会では、その作品が五十に達するのを記念して、芦丈先生を宗匠に正式俳諧を興行したが、これがはからずも先生と私どもの最後の会となってしまった。

この会の様子や作品については「山襖」の二十一号に、先生の筆でくわしく述べられている。御承知の方が多いと思うが、「山襖」は芦丈先生が昭和三十九年に創刊された連句専門の雑誌であった。当時すでに九十を越しておられた先生が、「山襖」の編集・印刷・発送など一切の事務を自分ひとりの手で処理されたのである。これはまさに先生の老いを知らぬ知力と体力とを証明するものであり、同時に連句復興にかけた先生の執念とでも言うべきものを物語っているものであった。それで、くわしい事はその「山襖」の記事を見ていただきたいのであるが、三月十二日の午前十一時、宗匠の芦丈先生以下、それぞれの役を定め厳かに興行された。中入り三十分、再開して午後四時に満尾、執筆は懐紙を整えて吟声を行ない、これで一切が終了したのであった。

この会は私どもの忘れ得ぬ思い出である。芦丈先生も「山襖」の編集後記に、信大の連句会は五

十巻満尾に、正式俳諧を興行しました。現今では何処の会でも、正式と言っても前日に作ったものの名残裏六句位を、出勝にしてお茶を濁しているのに、此記念会では歌仙を一巻完全に付けあわせた事はいささか誇るに足ることです」と書いて、満足の意をあらわしておられる。だが、この時以後、先生は健康を害されて、再び松本に来られることがなかったので、結果としては、これが先生とのお別れの会でもあったのである。

顧みれば、昭和三十六年の秋、宮脇昌三氏の紹介によって、先生から連句の手ほどきを受けるようになって、私どもははじめてこの連句というもののおもしろみとともにその価値を知った。それは言うならば三十六句の中に森羅万象を盛りこみ、その微妙な調和と変化との中に、つまりはこのおかしくまたかなしい人の世の相を写実し、咏嘆し、哲学し、象徴するものであろうが、それだけに、俳句のみでは到底味わうことのできない深みとひろがりとを持つものである。そして、それは明治以来の学者や俳人たちの誰も知らず、教えてもくれなかったものなのであった。世間には連句をやるなどと言えば、アナクロニズムの典型のように思う人々がまだ存在しているが、連句の真の楽しさと価値とを授けられた私どもは、そんな頭のかたい人々を気の毒だと思う。

芦丈先生もその長い生涯に、連句に対する世人の無理解、無知識に幾度か悩まれたことであろう。明治中期のいわゆる俳諧革新以後、連句は非芸術であるという何の根拠もない独断が、今日まで根強く残って世の常識となり、それに反対することは近代人の資格がないように思われ、結局その大勢に押されて、連句というものは次第に葬り去られてしまったのである。芦丈先生はそのような理不尽なもの、筋の通らぬ俗説に抵抗して、九十余年の長い生涯を戦い抜かれたのである。

先生はしかしながら、滔々たる世の俗説に、徒手空拳で立ちむかわれたのではない。先生にはそれだけの実力と自信とがあったのである。先生は明治二十七年、二十歳の時、呉竹園馬場凌冬先生の門に入られ、凌冬先生の沒後は、下平可都三・松永蝸堂・贄川他石・茂木秋香などの錚々たる人

たちに教えを受け、また中村竹邨・増田龍雨などの俊英と風交を重ねられた。その他、生涯を通じて風交された俳人は全国にわたり、巻かれた作品の数は三千巻に及ぶという。これは俳諧史上、もちろん空前ではないが、おそらく絶後の記録であろう。これは一つには、先生がおどろくべく博覧強記であったことによるであろう。先生は学者が誰も書いていないことで、しかも大切なことを実に細かに正確に知っておられた。これらが先生の名吟として有名な山一重や下蔭三吟などを生む基となったのである。故天野雨山氏は芦丈先生を天明中興以来の巨匠と目し、蕉風俳諧最後の人と称したそうであるが、これは決して溢美の言ではなく、先生はこの評価に値するものを充分に持っておられたのであり、そのあたりのかけ出しの俳人などでは到底太刀打ちのできないものがあったのである。芭蕉が切りひらき、蕪村らがそのあとを襲いだ俳諧の道は、今や行く人もなく荒れ果ててしまった。その雑草の生い茂って、踏みあともわからなくなった細道を、たった一人でたどって行く逞しい旅人、それが芦丈先生のイメージである。私どもは先生のそのイメージに感動して、ともかくもそのあとに続こうとしたのであった。

先生は毎月、松本に来られて私どもを指導された外、東京や寄居や松代、その他全国各地に残る連句の愛好者を訪ね、その指導と育成とに尽力され、九旬を超えたその齢を忘れられる程であった。これは先生が自分だけが知っている風雅の道を、何とかして後世に伝えようとされた一心からに外ならない。それなのに私どもは、先生のこの熱心さに、どの位おこたえすることが出来得たか、省みてただ恥じ、後悔するばかりである。

先生は昭和四十二年の十月から遂に病床に臥されるようになったが、たまたまこの年は信州の生んだ巨匠春秋庵三世倉田葛三の百五十年忌にあたっていた。葛三と同じく松代の出身で、昭和初年から芦丈先生の門弟となっておられた清水瓢左氏は、夙くからその追善大会を企画しておられたが、いよいよ会を数ヵ月後にひかえた時、私は氏の依頼によって執筆の役を引きうけねばならないはめ

になってしまった。これは芦丈先生が春以来、御健康がすぐれず松代にお出かけが困難になって来た為である。私などがこの晴の訳を勤めるなどおこがましい限りであったが、すでに過疎地帯となっている連句国では、代役の人にも事欠き、遠慮ばかりもしていられなかったのである。そこで私は執筆の作法を芦丈先生に教えていただくことにした。その年の夏のことである。先生はその頃、相当やつれておられたが、割合にお元気で、時には立ち上がって文台捌きの型を示して下さり、吟声も教えていただいた。さらに九月の末になって、先生は私を伊那へ呼ばれ、稽古した執筆の型を見て下さった。先生はこの会のことを随分気にかけておられたのである。お陰様で私は十一月十二日の追善大会で、大過なく執筆の役を勤めることが出来た。これは私の一生の光栄の一つと考えている。

追善会が終ってその翌々日、私は伊那に先生を訪ね御報告と御礼とを申し上げた。霜のきびしい朝であった。十月に倒れられてから病床に寝たきりの先生であったが、わざわざ床から起き上がって大変よろこんで下さった。ことに、その追善会の席で、真田家の宝物であった文台、これは蓼太が献上し菊貫公が愛用されたという金蒔絵のすばらしいものであったが、その文台を使わせていただいた事を話すと、先生もその由緒のある文台のことはよく知っておられ、涙を流してよろこんで下さった。

その頃、弟子たちの間には二つの計画がひそかに練られていた。一つは松本の弟子たち、特に藤松素香、田淵芹川両女史、それに信州大学長である池田魚魯氏などが参画されたもので、連句をひろく世人に理解していただくためにN・H・Kのテレビに出ていただこうというものであった。また他の一つは東京の方々、特に清水瓢左氏、三井武翁氏らを中心としたもので、芦丈先生の長い長い俳諧に対する功労を国家から表彰して貰い、これを機に世人に俳諧を再認識させようというものであった。だが、先生の御健康は日一日と傾き、それにつれて、私どもの焦慮と悲嘆も日一日と深

くなって行ったのである。

先生の病篤しと聞いて、お見舞の手紙を差しあげ、またはるばる駈けつける者も多かった。城倉巧葉・御子柴宗甫・青柳霞亭・根津雄峯など地元の門人の方々はもちろんであるが、十二月には松代から若林永雪・小林光雨・湯本牧人の三氏、東京からは瓢左氏が見舞っておられる。瓢左氏は一月にも再び見舞われた。二月になると松代の新村草聖氏、松本の小出きよみ氏などが訪れて、先生の病苦を慰めておられる。その他、私の聞き洩らした方々も多いに違いない。私も十二月の末にお見舞い致したが、この時先生の病状は頓に悪化しておられた。先生は耳は殆ど聞こえなくなられ、顔も体も見違えるほど痩せられ、いたいたしかった。私を見てはじめは医者と誤認されたようであったが、私だということが分かると、盛んに俳諧の話、ことに松代の文台のことばかりを話される。まことに最後まで先生の頭の中は俳諧のことで一ぱいだったのである。私は長くなってお疲れにならぬようそこそこに辞去したが、これが芦丈先生との今生のお別れであった。

先生の訃の伝えられた日、冬型の天気が崩れて、昼は暖かになり、夜は皓々たる満月が輝いていた。私は先生にお別れした悲しみとともに、先生の御生前に教えていただくべきであって、もう永久にその機会を失ったものがいかに多いかを考え、悔恨の情に耐えられなかった。さらには先生のテレビ御出演、叙位・叙勲もついに先生の御存命のうちに実現できなかったことなど、慙愧の種ばかりである。先生も私どもに伝えたいと思われたものが山ほどあって、さぞかし御心残りであったに違いない。それを思うと今でも胸が痛む。

先生の御葬儀は昭和四十三年二月十六日、伊那市西町長桂寺で俳諧葬を以て挙行された、全国遠近の俳人およそ百名、一般を加えて三百名が参列して、導師の引導につづき、前日棺前に於て興行した、「冬うらゝ死に下手昼も寝てばかり」という故人最後の句を立句に、脇起り歌仙が厳かに披講され、まことに一代の巨匠の最後にふさわしい強烈な感銘を一同に与えた。諡(おくりな)は得庵芦丈居士、かくて先生の御霊は永遠に長桂寺所管の根津家累代の塋域へ葬られたのであった。

冬うらゝ死に下手昼も寝てばかり　芦丈仏

春まつ梅の猶かたき縁　巧葉

垣の外水の流るゝ音たてて　瓢左

足中草履ぬぎすてし子等　渓水

待ち得たる立待の月晃々と　明雅

熟れし葡萄の房大い也　雄峯

収穫に父鉢巻をひきしめて　昌三

集会ふるゝ人は誰やら　玄一郎

女子寮に味噌汁匂ふ夕ま暮　素香

床にころがる禿びし紅筆　芹川

毛糸編む過去さまざまの糸繋ぎ　きよみ

近うなりたる沓音の凍　五七

アルプスの連峯見事月に晴れ　魚魯

南へむかふ避暑あけの客　半歩

朗詠の御国自慢も爽かに　紫晃

賜ひし酒の微薫嬉しき　花笑

咲ほこる花に珍らし雪景色　桜愁

帋の小旗のそよぐ初午　柯丈

蜆売る若者の声きびきびと　宗圃

複々線も陸橋の下　寂羊

梅雨あけといふ間にはやも土用入　唐風
吾子がすやすやハンモック揺れ　秀翠
媒酌も義理にからまり断れず　永雪
お色直しといふて洋装　洋洲
断層が幾度明治百年へ　和風
ワンマンも世を救ふ宰相　暁星
病む人を看護する身を幸と　芙紗
細々開く月のさす窓　霞亭
行秋を茄子の味も殊更に　峡雪
紅葉を仰ぐ洞庭の船　不墨子
羊追ふ牧童の声甲高く　無腸
党利党略民の怨に　江南
ベトナムの反戦論が上院へ　光雨
霞うすれて開け行く空　牧人
慕はしや花の主の教草　巧葉
木の芽匂へる庭にひれふす　執筆

（『苧日記』より）

五右衛門風呂

根津芙紗

我が家は核家族の走りだったらしい。昭和八年にこの隠居を建てたという、母屋から二米ばかり離れて風呂場と物置があった。三坪ばかりの物である。風呂場と物置の境に電球が一つどちらからも都合のいいように壁を切って真中にあった。この風呂には脱衣場がなく棚だけだった。母屋で着物を脱いでいくと下駄をはいて外を歩くことになる。雨でも降ると大変だが何故か雨にあたるのも冬でない限りいい気持ちだった。あの感触はあれ以来一度も味わったことがない。

鼻歌まじりに風呂に入っていると必ずおばあさんがとんで来て「房子さん、お風呂焚きましょうか」というのである、「ええ、お願いします」と答える、実はこのおばあさん後妻だものだから決して孫達を呼び捨てにしないのである。私達はおじいちゃん、おばあちゃんといいたいのに、おじいさん、おばあさん、母などはおじいさま、おばあさまと丁寧なのである。私達は誰からも聞いたわけではないのに後妻のおばあさんということを知っていたのだ。「なんだおじいさんは二人もおばあさんを貰ったのかね」といって父母達を苦笑させたことがある。

学校の帰りに煙突から煙が上っているではないか、来いともいわないのに人にいい私はのこのこ出掛けていった。「お風呂下さい」。おばあさんは困惑しておじいさんに相談にいった、おじいさんはいやともいえず「お客様が来るからよごさないように入れよ」といって引込んでしまった。子供心にへんだなと思ったが入ってしまった。そしてそーと入ったが気持は良くなかった。よせっていえばいいのに、あの時のお客さんは豊橋の方で緑鮮さんよりもっとえらい人だったのかも知れない。実はこの五右衛門風呂、おじいさんの七十七のお祝に父の姉弟が相談して作り替えてやったものだ、

工事の最中になにか父と祖父とでもめていたようだったが、それもあのおばあさんがもとではないかと思う、幸か不幸か物議をかもしたおばあさんは六十三歳であっけなく逝ってしまった。

それからが祖父は健康管理専一だ。「房、風呂が湧いてるよ、薬湯のいい風呂だ」。いやにやさしい、それでは一風呂浴びようと蓋をとったはいいがごもくだらけ、「なんだ！　これは」。うす暗い風呂をすかしてみれば、接骨木、どくだみ長いままである。湖の流木と同じだ。そういえば朝、母に「接骨木はあるかい」と聞いていたっけ、若い娘がえらい風呂に入ってしまった。「おじいさん、ああいうものは袋に入れてやるもんずら」「なに、端によせて入りゃいいもんだで」「ふうん」、それでもこの五右衛門風呂、夏には家中で助かった。

大鍋に公魚が山椒の実と煮てある、恐る恐るつまんでみると「うまい」。味付けがいい、なかなかやるわいと「おいしいぢゃん」というと「諏訪からな売りに来ただよ」。自分も諏訪にいたから話が弾んだことだろう。たびたびだった。

「橋原の善内様はな、お葉漬は薬だぞねといって、丼も食べたちゅうだ」。お葉漬は腸の内壁をきれいにするから身体にいいとか、海藻や小魚のカルシウム良質な蛋白質は老人に必要だといって豚肉も良く食べた。へたに野菜ばかりだすと「こんなものには栄養はない」となる程。いま盛んにいろいろいわれるが以前から理屈は同じなのだ。夜長の炬燵でこんな話からお茶をのむ話になっても私と妹は顔を見合わせただけで入れようともしない、祖父が立っていって入れてくれる、生れながらにして小ずくがあったのだろう。

それより少し前になるが昭和二十三年頃だ。伊那町の町長選が行われた。国民服に下駄ばきの祖父は後へ手をやって場所を変えながらしゃべっているではないか、聞いている人は二、三人。へんだなあと思い母に聞くと「選挙運動だよ」と、町長のＩさんの責任者だということだ。隣の家の里ちゃんが学校に行きながら「うちの父ちゃんと母ちゃんが根津さんのおじいさんが責任者だで当選

は間違いないっていってたよ」「へえ」。私には選挙がどうのこうのというよりおじいさんがほめられていることが子供心にもうれしかった。

当選したのも束の間何があったか知らないが地の人でなかったせいか、一年もたたないうちにお終いになった。そして何処へ行ったのだろう、どこの人だったのだろう、それにしても祖父は物好きというのか、人がいいというのか、今考えてもおかしい。婦人参政権、はじまりの年だった。

「明日から、ひと月ばかの旅に出るで、留守を頼む」「へえ、ひと月もかい」「いつも通りな」。このいつも通りというのが私も妹も重荷なのだ。雨戸のあけしめ、新聞をとり入れて朝夕の温度と天候を日記帳に書き入れる、雨戸もへんな時間にあけたりしめたりしていれば近所がへんだと思やしないか気をつかうし、戸袋にきちんと雨戸を入れないと余ってしまうのではじめからやりなおし、昼間暗い家に入っていくのもいい気はしない。母は「しばらくはしめておいてもいいよ」というのだが私と妹は「温度が困るじゃんねえ」。三日もいかないでいると天気まで忘れてしまい、夏休み中の日記そのものだ。早く帰ってこないかなあ、妹は「おみやげは何かねえ」。今ごろは四国あたりか九州にいるのか、よく泊めてくれるところがあるねえ、どこにいるか分らない留守番をくり返していた。夜の雨戸をしめようと行ってみたら、戸が開いておじいさんがいるではないか、「どこから入ったの」「なにっっかえ棒を指ではずしたさ」「ええっ」。まあそれはそれでいい早くおみやげを出さないかなあと待っていると伊勢という文字の入った用貝を二本「保子と一本ずつな」。なんだこんなもの用貝ならあるのに、選りに選って一番小さいやつだ。旅の話などどっちでもいい母に告げねば、「これがおみやげだってさ」「いいぢゃんかい、欲ばるもんぢゃないよ」とこっちも平気、妹は無言、やり場のなかったことがいまも思い出される。それから何年かたって那智の硯をおみやげに貰った。一番小さいのだが今は朱の硯に都合よく使わせていただいている。

「あーあー家はいいよ、寝る程楽なことがあらばこそ」といい乍ら大鼾でねてしまった。ぐっすり

寝たあとは必ず幻住庵記をうなりだす。「石山の奥、岩間のうしろに山有……」。うるせえなあと聞きながらうとうと。いつまでも続いている。「先づたのむ……」。これが出てくるとやっと終り、どうしてあれを暗記していたのだろう。

凌冬先生のこと伊東月草さんのこと等いく度も聞かされている筈だ。その他連句の内容だって聞いている筈なのに、私の悪い癖「ふうんふうん」と相槌はうつのに何も残っていない。くだらない話だけはあざやかに覚えている。思えば遠い古い話だ。

芦丈先生と信大連句会

東　明雅

昭和三十八年三月九日の私の日記に、「朝学校に行き、テープコーダーを取り、浅間柳の湯に届ける。明日の連句会の準備なり。柳の湯は松本藩の士族の湯にして、池田魚魯先生の斡旋によるもの」とあり、当時、松本に住んでいた私は、芦丈先生の指導の下に、信大連句会を作り、毎月第二日曜に浅間温泉柳の湯を会場に、連句会を開いていたのである。翌十日には「朝より雪降りしげく終日やまず。九時すぎ家を出て柳の湯に行く、芦丈翁すでにありて湯に入りおられる。十一時より俳諧はじまり三時半ごろ半歌仙終る……」。四月は十四日、五月は十二日に行なわれているが、その記事に「十時すぎ浅間温泉望岳荘に行く。紫晃氏（望月）のみあり。ややありて芦丈先生、高夷氏（細田）、渓水氏（倉科）、ひる近く素香氏（藤松）、きよみ氏（小出）、雪渓氏（藤森）見ゆ。No.9の後半を続ける。昼食後魚魯氏（池田）来。時間を間違えたとのこと、四時半までかかり満尾、その上No.10の表六句をつくり、五時ごろ入浴して帰る。……」とある。当時の信大連句会の主なるメンバー、ならびに様子がうかがい知られるだろう。その外、別に三月二十二日には先生を拙宅におよびしてあったと見え、「朝九時前、朝食中根津先生来訪される。早速、午前中いろいろ俳諧に関するお話をうかがい（全部テープに取る）、午後二時ごろより対吟、二十句位にて、五時の汽車にのられるので、タクシーで駅まで送る。夕食後テープの整理」とあるから、この「芦丈翁俳諧聞書」の大部分は、前記の柳の湯で取った部分と、この蟻ヶ崎のアパートで取ったものと二つが混じっているわけである。そのあと、と六月・七月も第二日曜に浅間に出かけ、ことに七月は朝十時前、望岳荘に行き、十一時ごろ全員揃い、芦丈先生の発句で、午後四時ごろまでに首尾しているから、信大連句

会独特の速吟の傾向は、すでにこのころから現われていた。

八月、松本の元町に建築中だった私の家が完成し、引越その他で忙しかったのでこの月は欠席、九月・十月にはやはり望岳荘に出かけ、十一時から四時までに一巻満尾している。

十一月九日には東京で都心連句会主催の芭蕉二百七十年祭正式俳諧が、早稲田の松声閣で行なわれ、芦丈先生は宗匠を勤められたのに招かれ出席、この時、都心連句会の瓢左先生、牛耳氏、杣平氏、武翁氏などと初対面をする。まさに、信大連句会草創の期であった。

先生の捌きは、例の「心法」によるものである。これは自他場の法を中心としているけれども、それにとらわれない自由、かつきびしい捌きであった。だから、初心のうちは捌きの要領がなかなか理解できなかったが、現在にしてみれば、そのすばらしさを初めて認識でき、その道を人様に教えるにも自身がもてるようになった。「連句は最初に習った先生によって良否が決まる」とは、先生の口癖であったが、それまで連句とは無縁だった私どもが、はじめから芦丈先生という日本一の先生に、手取り足取り教えていただいたことは、まことに盲亀の浮木というか、まさに天佑としか言い様のない好運なことで、現在も感謝している次第である。

先生の捌きの一座は、賑やかではあったが、騒がしくはなく、また、連衆誰に対しても優しかったが、捌きは公平で厳しかった。それで付句を連衆に催促されることはなかったけれども、自ら連衆は安心して付句を考える気分になり、競って短冊を出した。それを先生はテキパキと片づけて、進められた。時によって皆が付けあぐねていると、先生ははじめて、「それじゃ、ここ、わしが貰うか」と言って、御自分の句を出される。だから、歌仙一巻を四、五時間というスピードは、信大連句会にとっては普通のことだったのである。よい捌きは淀川の水のようなもので、見たところゆったりしているが、極めてスピードが早いと、ある連歌論書に書いてあったが、まさにその通りであった。

そのように、先生の捌きは一見悠々として、決してあせったり、無理をしたりされなかった。よい句が出ると、そのことについて、いろいろ評をしたり、関係のある話しを長々とされる。たとえば、昭和四十一年三月の「鳴く雲雀」の巻で、ウラに入って、折立から、

酔うほどに新酒も古酒も変わりなく　明雅
　忘れたき人忘れぬもよし　きよみ

と、小出きよみさん（『恋句曼陀羅』の著者）が恋句を呼び出すと、待ちかねていた連衆は忽ち雨霰のように短冊を出す。芦丈先生はそれらの中から「ホウ」と言いながら次の一句を取りあげられた。

王冠を賭けし世紀の恋もあり　魚魯
魚魯先生（故池田雄一郎、元信州大学長）、一世一代の名句が飛び出したのは、この時であった。

それに続いて、芹川さん（田淵日出子さん、故田淵行男氏夫人）の

　ミンクのコート露地をぬけゆく　芹川

が出て、一同をうって感嘆したものであった。

この時は、先生も大いによろこばれて、例のシンプソン夫人の話から芸者ぽんたの話までされた。芸者ぽんたと言っても、若い人には不案内であろうから、「山襖」二十号に掲載された先生の話を再録しよう。

近頃出来た恋句で、いささか誇るに足る二三をあげて評釈してみる。信大の文理学部の会で出来た、雲雀の巻の初裏の一連、

王冠を賭けし世紀の恋もあり　魚魯
　ミンクのコート露地をぬけゆく　芹川

此前句は、英国の王室にての出来事で、誰もが知り過ぎる程の事実である。「君と寝ようか五千石

とろか何の五千石君と寝よ」と云う俗謡があった。旗本の家を捨てて惜しくもない。又東京の鹿島清兵衛さんは、芸者の「ぽんた」を落籍させて、養家を棒にふって惜しくない。此鹿島家などは長者番付の上位であった。近き頃、その屋敷跡から大判小判がぞくぞく出たとの事だ。何ものを捨てても惜しくないという心情はみな一つである。この前句に対し「ミンクの毛皮のコートを着て露地をぬけゆく」――心憎いほどの付味である王室・旗本・大富豪と上下はあっても、もゆるような情に至っては差別はない。

と、このような挿話が次々に披露され、その博覧強記ぶりは卒壽の翁とは到底思われなかった。だから、一座は常に和やかで楽しかった。しかも、先生は新しいものを求めて生涯立ち止まるということがなかった。私たちが新しい言葉、事柄を句によむと、先生は忽ち関心を示され、分からぬことは質問され、吸収しようとされた。この常に新しさを求める態度が、七十余年の俳諧師としての生涯を、常に魅力的にした理由の一つであろう。

先生が没られたのは昭和四十三年二月である。そのころは連句が明治以来続いた暗黒時代が漸く終ろうとする時代であった。大畑健治氏によれば、昭和連句の黎明は、昭和四十五年だということである。昭和四十五年といっても、現代のような連句再興が目に見えて、一時に賑かになった時代と違って、漸く曙光が見えたというにすぎなかったが、「連句再興」を念願として、昭和三十八年、九十歳の高齢にありながら、連句誌「山襖」を企画・発行され、編集・校正、そして出来た雑誌の頒布まで、独力で遂行された先生の悲願を思う時せめてその折まで生きていて下さったらと思い、また先生が今生きておられれば嘸かしよろこばれるだろうのにと、それのみが私の心残りである。

索　引

あ行

あ　アシライ　21
い　伊良湖崎　66
う　姨捨　48
　　梅の門　13
え　円熟社　91,93
お　大山体　73
　　尾越の鴨　10

か行

か　荷兮　74
　　歌仙　41,59,100
　　可都三　5,6,7,9
　　勝幸　5
　　蝸堂　31,32,33,109
　　香取神宮　79
　　亀山　66
　　蜀　10
　　烏谷　33
　　雅流　94,96
　　川口男爵　30
　　寒山　31
き　其角　69
　　蟻兄　27,28
　　喜太郎　97
　　狐雨　28
　　儿董　69
　　喜八　98
　　其鳳　29,30
　　旧派　4,11,12,35,50,97,98
　　曲川　36
　　虚子　94,97
　　魚魯　16,104
　　琴堂　7,8
　　錦風　71
く　国男　102,103
　　邦武　30
　　位の付け　86
　　黒髪庵　6
け　月草　13,103
こ　恋離れ　21,22
　　高夷　16
　　好一　35,36
　　孝允　26,27
　　黄雨　11
　　古錦　31
　　心付け　8,61
　　古式百韻　47,48,101
　　この一路　11,46
　　鯵(このしろ)　84
　　小弥太　30

さ行

さ　三郎　54,55
　　実美　27
　　猿男　11
　　猿蓑　51,54,60,66,69,86
　　三吟　12,35,91
し　子規　11,12,13,68
　　四季の正花　46,47,48
　　支考　60,61,69
　　紫晃　16
　　自他半　42,43,78
　　四丁　11,12
　　秋香　5,6,7,8,28,37,38,39,40
　　守拙　35,36
　　春湖　33,34
　　松宇　7,11,12,13,14,15
　　丈山　83
　　蕉堂　15
　　蕉風　29,64
　　蕉風(俳誌名)　40
　　蕉風をふみ出す　20
　　新撰組　26,29
　　心泉亭　97
　　信大連句会　16,93
　　新月並派　13
　　新派　11,12,49,50
　　晋風　49,71
す　純夫　99
　　炭俵　66,86,87
せ　醒雪　59,65
　　雪渓　16,18
　　蟬吟　61
　　善の綱　17,25
　　善鷹　103
そ　宗祇　64,80,86,87
　　蒼山　33,34
　　草上　13
　　葱嶺　95
　　素香　16
　　その場の付け　19,25,26,37,42,43,44,45,76,80,81,84
　　その人の付け　25,85
　　杣平　94

東　明雅（俳号　明雅）
大正四年　熊本に生まれる
昭和十四年　東京帝国大学卒業
信州大学名誉教授
猫養会主宰

著書　夏の日　角川書店
　　猫養　永田書房
　　連句入門　中公新書
　　芭蕉の恋句　岩波新書
　　新炭俵　角川書店
(共編)連句辞典　東京堂出版

〒277 千葉県柏市つくしが丘2-2-12
(0471-75-1192)

た行

た　他　41,42,……
　第二の留め　18
　降盛　26,27
　武翁　93
　他石　12,32,40,41,108
　たそやとばしる　70,71
　立句　18,40,62,74,86,93,101
　玉が転ぶ　26,45,100
　談林　61,64,65
ち　竹邨　4,5,12,34,35,99
　忠治　5,6
　潮五郎　95
　長範　80
つ　対付　109
　月の打越　13,14,84
　附合十七体　49,50,69
　亟夫　95
て　貞徳　61,64,69,75
　貞門　61,64
　出勝　59,91,95
　手びき蔓　69
　天明の鎧　13
と　冬季三句　19
　東洋城　98
　利通　27,29
　都心連句会　92,93
　十百韻　100
　鳶の羽も　51
　具視　27

な行

に　にひはり　11,12,13
　句付け　61,86
　人情の有無　22,……

は行

は　俳諧　12,49
　俳文学会　53
　梅游　4,98,99
　梅路　100,101
　麦雅　98
　馬骨　93,95
　芭蕉の心法　53,68,108
　八方自他伝　51,56,69
　花相撲　46,47
　花の本　101
　晩山　68
ひ　引馬野の記　33
　彦次郎　30
　百韻　48,61,63,64,100,101
　瓢左　99
　博文　31,32
ふ　史邦　53
　冬の日　41,54,66,69,70,81,87,89
　文音　4,9,13,35
ほ　鳳羽　11,26,27,29,30,100
　蓬宇　36
　豊城　94
　鳳朗　101
　北枝　50
　ホトトギス　11,94,96,97
　凡兆　52

ま行

ま　又右衛門　50
　市中は　54
　松菊　26
む　向い付　18,36
　無径　96
　宗房　61
め　明治維新　26
も　物付け　23,63,76

や行

や　野水　71,72
よ　義経　80
　吉野　48
　夜店のステッキ　94

ら行

り　李白　83,87
　流芳　6
　両吟　7,9,12,13,91,92
　涼袋　108
　凌冬　12
れ　連歌　59,60
ろ　露伴　70,74,82,83,103

芦丈翁俳諧聞書

発　行　平成六年三月七日
編集・発行人　東　明　雅
制　作　㈲仁デザインコミュニケーション
東京都中央区新川二―一―一―五〇二
電話　〇三（三五五三）四　〇　二　六
定　価　二〇〇〇円